

関西農業史研究会報

—No2-1979.3.3—

すっかり春らしくなってきましたが、いかがお過ごしですか。
オ15回例会は、1979.2.3.京大農学会議室で行われました。
参加者は6名で、飯沼二郎氏より「朝鮮総督府の農業技術政策」
について報告がありました。以下はその報告要旨と討論要旨です。

オ15回例会 1979.2.3 飯沼二郎氏 「朝鮮総督府の農業技術政策」

【報告要旨】

世界資本主義は、つねに相手国の工業を破壊し、自国の農業を犠牲にして、工業（産業資本）の発展をはかる。日本と朝鮮との関係についても基本的には全く同様であったが、日本資本主義の後進性の故に、その関係は互いめて苛酷であった。すなわち、植民地朝鮮においては、朝鮮人による工業の発展は全く抑圧され、日本向けの農業のみが発達せしめられた。

まず植民地化の冒頭に於いて行なわれた「土地調査事業」は、それによって総督府農政の対象であり支持者である地主層を確定し創出しようとしたものであった。次に、「産米増産計画」と「棉作増産計画」とは、ともに日本資本主義にとって最も必要とした、食糧としての米と、原料としての棉花の増産を企図したものである。

1918年の「米騒動」以来、朝鮮における産米増殖計画が本格化し、そして1930年以後の「昭和農業恐慌」以来、棉花増産計画に切り替えられ、1940年以後戦争の激化と共に再び産米増殖計画に切り替えられたことは、それが如何に日本人本位のものであったかを示している。「土地改良」、「土性調査」、「穀物検査」の諸事業もまた、すべて米と棉のためのものであった。

総督府はまた、勸業模範場、次いで農事試験場をつくったが、そこで行なわれた試験・研究も、ほとんど米と棉に集中された。もともと朝鮮の気候は、日本に較べてはるかに乾燥しており、水田よりも畑作の技術が発達していた。しかし、勸業模範場・農事試験場の農学者（たとえば1931年度に、技師・技手・雇合計七人の内、朝鮮人は兼任技師に1名）は、当時、日本の農学が水田中心であったことと、朝鮮人に対する蔑視から、朝鮮の優れた畑作技術をほとんど正当に評価することができなかった。ようやく、それに目を向けはじめたところで、敗戦により撤退を余儀なくされたのであった。（飯沼氏）

【当日の報告骨子】

序説 日本の植民地支配の特徴—世界資本主義の中心—

第一章 朝鮮総督府の農業政策

- (1)産米増殖計画 (2)土地改良計画 (3)土性調査事業
(4)穀物検査事業 (5)棉花増産計画 (6)土地調査事業
(当日は時報の欄で、(1)と(6)を中心に報告された)

第二章 農業試験研究機関

(1)沿革 (2)基本方針 (3)事業内容 (4)農業立地 (5)作物の種類 (6)収量 (7)播種栽培技術

【討論要旨】

[1] はじめに、朝鮮の農業技術について討論がなされた。①朝鮮における犁の普及度と犁耕技術の高さが紹介された。次に、日本の犁との関係が議論された。飯沼氏は、清水淳氏の無床犁→長床犁→短床犁という日本の犁の展開過程について説を批判し、正倉院の無床犁や延喜式の中長床犁の紹介等から、古くから両者が並存していたことを強調した。そして、それらは既に朝鮮から伝へてきたのではないかと述べた。②乾番栽培は、雨の少ない朝鮮地方で広範に行なわれている dry farming であり、陸稻栽培とは異なることであった。また朝鮮においては、畑作技術が高度に発達しており、輪作体系を中心に畝の作り方まで細部に分けて畑作技術が紹介された。③農書類は、15世紀以降見られるが、両班によつて漢文で書かれており、中国の農書を下敷に朝鮮の事情を加味したらしいものである。農民の中には、38人が普及しなかつたと思われろ。④以上のような討論の後、朝鮮農業の地帯区分について論議となった。詳細は右ページの表を参照のこと。

[2] 続いて、日本帝国主義が朝鮮の農業構造をいかに変えていったかが討論された。①李朝末期の地主制は、兩班地主と庶民地主が

あ、たが、政府は土地調査事業によつて前者を否定し、後者を、
更に日本人地主も積極的に植民すること、その経済基盤とした。

②日帝は畑作を否定し、米と綿の単作化をはかきものどあ、たと
これ、技術的には土地改良と金肥投入が中心であ、たとととととと
た。但し朝鮮農業をどこまで変ええたかについては疑問があ、た。

朝鮮農業地帯の区分とその特徴

(徳川)

I. 高冷(畑作)地帯

地域	田畑の作付方式	主作物	その他の特徴
(1)咸南高冷地域	火田(焼畑)式耕作	馬鈴薯、玉蜀黍	夏季冷涼、冬季厳寒畜産盛ん、 農家は自給自足経済にして階級 の分化は著しくない
(2)平北	1年1作又は休閒式	黍、粟、大豆	

II. 山間(畑作)地帯

(3)咸北山間地域	1年1作が主で、 稀に変形2年3作	粟、大豆、大麦	零細農少く、土地の兼併は著し くない。畜産、養蚕が相当ある。
(4)咸南	2年3作次第に密 度を増す	粟、大豆、稗	以下ほぼ同じ
(5)平南	単作、混作が多く 2年3作が行われる	粟、大豆、小麦	
(6)江原	2年3作と1年2 作との混作	粟、大豆、小麦	

III. 畑作地帯

(7)平北畑作地域	1年1作を主とす	粟、大豆、玉蜀黍	畜産、養蚕が盛ん
(8)黄海	2年3作を主とす (水田作地区あり)	粟、大小豆、小麦	零細農少く、経営規模がやや大
(9)京畿	1年2作(水田の 分布やや多し)	粟、大豆、大麦	零細農やや多し
(10)忠北	1年2作	棉、大豆、大麦	大土地私有は大ではなく、農民 の経済状態は窮迫していない
(11)慶北	1年2作	粟、大豆、大麦 (春播あり)	やや大陸の気候、零細農多く、 農家経済は良好ではない。

IV. 稲作地帯

(12)京畿稲作地域	2毛作は行われず	水稻	零細農多し、不在地主が多く、 農家経済は良好ではない
(13)忠南	2毛作は相当行わ れる	、変	大地主やや少なく、農民の経済 は良好
(14)全北	2毛作は比較的少い	、	零細農多く、経済組織はきわめ て単純
(15)全南	2毛作は相当行わ れる	、麦	
(16)慶北	2毛作は比較的少い	、	零細農多く、経済組織は比較的 単純
(17)慶南	2毛作は盛ん	、棉作多し	零細農多く、経済状態は良好で ない
(18)多島海沿岸		甘藷、麦、棉	半漁半農が多く、経済状態は不 良ではない

V. 島嶼地帯

(19)ウッ陵島	畑作主体	馬鈴薯、玉蜀黍	半漁半農
(20)濟州島	休閒式又は1年1 作多し	甘藷、大麦、粟 陸稲	朝鮮唯一の馬産地

(京大農・東北計画)
 今井敏行氏「明治朝鮮農村の事情」の抜粋
 (京大農学研究所蔵)

本16回例会(2017年10月)

本会蔵書(京大農学研究所蔵)

(1017-18-1110)